

第29回 御池烏丸西南の界隈

■ 三条釜座

本シリーズ第21回の「復活した柳の水」のあるところから、西洞院三条郵便局の辻まで北上します。この辻の東南の角に「三条通西洞院東入釜座町」③が掲げてあります。この看板は、二〇一六年の再調査の折に見つけたものです。仔細を見ると、この町名看板は「中京区」の表示が左から右になっており、しかも、「区」が新字体になっているので、最近のプロジェクトにより設置されたものであることがわかります。厳密なことをいうと、この看板の設置位置は、西洞院通ではなく、三条通に掲げる必要があります。多分、三条通の店頭の角には余地が無かったのでこのように設置したものと推測されます。

西洞院三条郵便局の辻を東へ折れて、三条通を進むと、「御釜師」なる看板。そこは、大西清右衛門美術館です。釜師とは、茶釜を製造する職人。初代浄林（一五九〇～一六六三）が一六二〇頃、三条釜座の座人になったことが大西家の始まりです。千家十職の一つ。当主はおおむね清右衛門を名乗り、現在二六代。

三条釜座は、製造業者の同業組合です。鎌倉時代には、すでに三条釜座町のあたりに製造業者が住んでいたという記録があります。室町時代から安土桃山時代に茶道が流行するとともに、茶釜

町名看板の所在（御池烏丸西南の界隈）



御釜師の看板



大西清右衛門美術館



三條通 西洞院 東入 釜座町 ③



鑄造が盛んになり、座としての体裁が整うようになりました。豊臣秀吉配下の京都所司代であった前田玄以の『玄以法印下知状』の中にも、三條釜座に宛てた天正十一年〔一五八三〕付の下知状が残っています（振りがな、訓点付与）。

釜座事。任^{まかせ}繪旨^ニ可^レ爲^ス如^ク先規有來。若^シ拔賣之族^ハ在^レ之者、三條爲^ニ座中^ニ如^ク法度^ニ仕候。荷物^ハ可^ニ押取^リ候。相紛儀候者、以^テ糺明^ニ可^ニ申付^テ候状、如^レ件。

天正十一年 十二月廿日

三條釜座衆中

『玄以法印下知状』塙保己一編『続群書類従・第三輯下』

続群書類従完成会、平文社（一九二五）

（書き下し文）

釜座の事。繪旨に任せ、先規有來の如く爲すべし。若し拔賣の族之在らば、三條座中の爲に、法度の如く仕り候ふ。荷物は、押取るべく候ふ。相紛の儀候はば、糺明を以て申付るべく候ふの状、件の如し。

天正十一年 十二月廿日

三條釜座衆中

繪旨は、天皇よりの略式命令。ここでは、大永五年〔一四一〕の後柏原天皇、天正二年〔一五七四〕の正親町天皇が、三條釜座の利権を安堵した。その後、天正四年〔一五七六〕に織田信長も三條釜座を安堵しています。天正一〇年〔一五八二〕の本能寺の変で信長が敗死したあと京都にはいったのは、豊臣秀吉

です。ここに示した天正一一年（一五八三）付の下知状は、これまでの経緯を認めて、三条釜座の公認を続けることを表明したものです。三条釜座は江戸時代も続きますが、しだいに衰えて、明治維新期に途絶えてしまいました。

現在、三条釜座付近に残っている釜師は、大西清右衛門（中京区三条通釜座西入釜座町南側）のほかには、高木治良兵衛（中京区三条通釜座東入釜座町南側）。現在は六代目。

■ 釜座通の江戸時代の名残

三条通の北側、杉玉を掲げた居酒屋と隣家の境界に、町名看板「三条通新町西入釜座町」②が掲げてあります。仔細に見ると、この町名看板は「中京区」の表示が左から右になっており、最近のプロジェクトにより設置されたものです。

大西清右衛門美術館の前は、釜座通と三条通の丁字路になっています。釜座通を北へ。この両側は、突抜町。『京町鑑』（宝暦十二年（一七六二年）刊行）には「釜座通佛具屋通若宮通」の項があり、両側町が列挙されていますが、その中に、姉小路下ルに「釜座突抜町」の項があり、

▲ 釜座突抜町

此町浄宗寺といふ西門徒有。此町の南の辻三條通にてはちまたり行當也。

白露『京町鑑』、宝暦十二年（一七六二）

『新修京都叢書第十卷 山城名跡巡行志・京町鑑』



さんしょうどおりしんまち
三条通 新町 西入釜座町②

光彩社（一九六八）
のように説明されています。この浄宗寺（浄土真宗西本願寺派。中京区釜座通姉小路下ル突抜町）は、この記載から三百年以上を経て、現在もこの場所にあります。

釜座通と姉小路通の十字路を西へ。色見本と書いた看板の取り付け部分に鐘馗さん。

釜座通姉小路上ルは、津軽町といえます。釜座通の西側が津軽藩の藩邸であったことに由来します。『京町鑑』（宝暦十二年（一七六二年））縦町、「釜座通」の項に列挙された両側町の中に、「津軽町」が御池下ルにあげられており

此町西側に津軽の御やしきあり。



屋根の鐘馗

と説明されています。『京羽二重』（貞享二年〔一六八五〕刊行）では、次のように記載されています。

津輕越中守殿 奥州松前四萬四千石

屋敷

釜座突抜姉小路上ル町

留主居

添田八左右衛門

『京羽二重』（貞享二年〔一六八五〕卷五

『新修京都叢書』第二卷「京羽二重・京羽二重織留」〔一九六九

『城池天府京師地図』（寛延三年〔一七五〇〕）では、「津輕京亭」の表示があり、津輕町（新町通）へ東面する門と姉西洞院町（西洞院通）に西面する門が描かれています。第28回で載せた『大成京細見絵図・洛中洛外町々小名』（慶応四年〔一八六八〕）の部分図にも、「ツガル丁」があり、「ツガルヤシキ」の表示があります。

御池通に出ると、新町通御池西南角の歩道植え込みの中に「肥前鹿島鍋島藩屋敷跡」の碑。肥前鹿島鍋島藩は、佐賀鍋島藩の支藩。支藩とはいいながら、独立性の高い存在だったらしい。この碑は平成三年（一九九二）の建立で、比較的新しい。



「肥前鹿島鍋島藩屋敷跡」の碑

■ 高松神明社

もう一度姉小路通に戻って、姉小路通新町西入北側に、高松神明社（姉小路通釜座東入津輕町）。この神社に由来する町名「神明町」が新町通の両側町としてありますが、この神社の所在地は、津輕町です。鳥羽天皇の高松内裏に祀られていた社が残ったと伝えられています。境内の西側に、オガタマノキ。中京区民誇りの木（指定番号C-04）に選ばれています。

神明地蔵



高松神明社



神明地蔵（説明板）



高松神明社のオガタマノキ



『都名所図会』巻之一（安永九年〔二七八〇年〕刊行）には、「高松神明」の項があり、

姉小路新町の西にあり。此地は鳥羽院の帝長門守師行に仰せて、高松の内裏を造らしめ給ふ。當社は内裏の舊跡なり。今社僧これを護りて 神明寺寶性院と號す。

境内には、神明地蔵尊が祀られていて、姉小路通に面した鳥居横に説明が貼つてあります。それによると、江戸時代に高松神明宮宝性院と称していたときに、寛政六年〔一七九四〕に善名称院から拝領したもの。真田幸村が関ヶ原の戦いのおと善名称院に蟄居したときに拝んでいたとされる地蔵尊で、「幸村の知恵の地蔵尊」として信仰を集めたと伝えられています。神仏分離によって神社になったのち、地蔵堂を建てて祀つたもの（地蔵尊の写真は、京都新聞二〇〇九年一〇月一五日に載っているので参照）。

『京町鑑』では、姉小路通の横町に、神明町があり、ここに神明社寶性院があると説明しています。

○（姉小路通）新町西入

▲神明町

此町北側に神明社有。寶性院と云。眞言宗也。南側迷子社あり。此社俗にまよひ子のはきものを片足持行、祈願をかけ、出たる時一足揃へて納る。甚應驗あり。

白露 『京町鑑』、宝暦二年（二七六二）
『新修京都叢書第十巻 山城名跡巡行志・京町鑑』
光彩社（二九六八）



高松殿址碑



高松殿址碑（駒札）

南側にあるとされている「迷子社」^{まよひごのやしろ}は、『城池天府京師地図』（寛延三年（一七五〇））でも確かに記載されていますが、現在は
ありません。

■ 高松殿址

■ 高松殿址の碑

高松神明社の鳥居脇に「高松殿址」の碑。傍らに、京都市による駒札が立っています。念のために、駒札の内容を書き取っておきましょう。

高松殿址

高松殿は、醍醐天皇の皇子、西宮左大臣と呼ばれた源高明（九一四〜九八二）の邸宅で、「拾芥抄」に「姉小路北 西洞院東 高明親王家」と記されている。

高明の娘、明子は、当所に住して高松殿と称され、後に藤原道長の室となった。その後、三条天皇の皇子小一条院の御所ともなったが、文献では、治安元年（一〇二一）と、更に百年後の保安元年（一一二〇）に焼亡記事が見える。

院政期の久安二年（一一四六）には、鳥羽上皇の命により新造され、造営には、後に大蔵卿となった長門守源師行が当たっている。久寿二年（一一五五）には、後白河天皇が当所で即位し、保元二年（一一五七）まで内裏となり、高松内裏とも称された。

保元の乱（一一五六）の際には、崇徳上皇方の白河北殿に対して、後白河天皇の本拠地となり、源義朝や平清盛らの軍勢がここに参集して、白河の地へ攻め込んだことはあまりにも有名である。

その後、平治の乱（一一五九）に御所は焼失するが、邸内に祀られていた鎮守社高松明神は、現在も高松神明神社として残る。

京都市

■ 源高明のこと

駒札の記載を参考にしながら、「高松殿」について調べてみましょう。幸いに、『拾芥抄』（鎌倉中期成立）の影印がインターネット (<http://hdl.handle.net/2433/277>) からダウンロードできます。実際に調べると、「諸名所部第二十」の表題を立てた中に、確かに次のような記載があります。

タカマツ
高松殿 姉小路北 西洞院東
高明親王家

ここに記載されている高明親王は、源高明（延喜一四年（九一四）〜天元五年（九八二））のこと。醍醐天皇の第一二皇子（母は源周子）で臣籍に下って、源氏を名乗りました。右京四条の豪邸に住んだので、西宮左大臣と呼ばれました。異母弟の村上天皇（延長四年（九二六）〜康保四年（九六七））、母は藤原穩子）の在位中には、藤原師輔（延喜八年（九〇九）〜天徳四年（九六〇））とともに治世を支えました。師輔の長女、安子は村上天皇の中宮で、その皇子が冷泉天皇、円融天皇として即位します。源高明は藤原師輔（延喜八年（九〇九）〜天徳四年（九六〇））の三女と五女（愛宮）を娶っています。

村上天皇の崩御、冷泉天皇の即位にともなうて、源高明は康保四年（九六七）に左大臣。このとき、右大臣は師尹（延喜二〇（九二〇）〜安和二年（九六九））、関白太政大臣は実頼。ただし、源高明は、皇太子に自分の娘を娶せた為平親王を擁立することには失敗。かわりに、その弟の守平親王（円融天皇）が皇太子に立ったのは、師尹ら藤原氏の策略。さらには、藤原氏のおかげでさまざま

他氏排斥は止めどがありません。藤原師輔が亡くなって後ろ盾がいなくなっただけでもあって、藤原氏との関係が悪くなり、源高明は、安和の変（安和二年（九六九））で失脚、太宰府に左遷されました。かわりに左大臣になったのは師尹ですので、安和の変はその陰謀なのは明らかです。虚偽の密告をしたのは、源満仲（のち多田満仲）ら。わが世をえたとおもったのもつかの間、師尹はその年の暮に死んでしまいます。『大鏡』にも、「安和の変は師尹が仕組んだ」との噂が、すでに流布していたことが記されています

左大臣師尹

この大臣は忠平の大臣の五郎、小一條の大臣と聞えさせ給ふめり。御母九條殿に同じ。大臣の位にて三年、左大臣にうつり給ふこと、西宮殿の筑紫へくだり給ふ御かはりなり。この御事のみだれば、この小一條の大臣がいひ出で給へるとぞ世の人聞えし。さてその年も過ぐさずうせ給ふなどこそ申すめりしか。それも實にや。

『大鏡』上之巻、「左大臣師尹」

『水鏡・大鏡・今鏡・増鏡』国民文庫刊行会（二九一〇）

(現代語訳)

左大臣師尹

この大臣は、忠平大臣の五男で、小一條の大臣と申し上げた。母上は九條殿と同じである。右大臣の位に三年いたのち、左大臣におわりになったのは、筑紫へ左遷された西宮殿（源高明）のかわりである。この変事（安

和の変)のおこりは、師尹大臣が言い出したことだと、世の人々の噂になっていた。「案の定、その年が過ぎないうちに亡くなってしまう」と祟りであるのを認めるかのような噂がたったのも、もつともなことであった。

師尹の突然の死に関して、源高明の祟りだという噂がたったのは当然で、源高明が天禄二年(九七一)にわずか一年あまりで京都帰還を許されるのは、藤原一族がそれ以上の祟りを恐れたためだと推測されます。第4回で述べたように、このころはまだ菅原道真の怨霊が信じられていた時代なので、すこしでも変わった事があると、身に覚えのある連中は、「次は自分が祟られる番かもしれない」と居心地がわるかったのでしょうか。源高明は、京都に帰還したのち、政界に復帰することなく隠棲。

『今昔物語』巻第二七には、「桃園柱穴指」出「兎手」招「人語」第三」という源高明の太宰府左遷を暗示するかのような話が載っています。粗筋は次の通り。

桃園の柱の穴、兎の手、指し出して人を招くこと、第三
今となつては昔のこと。桃園というのは、今の世尊寺の地で、当時は寺はなく、西宮左大臣(源高明)が住んでいらつしやつた。寢殿の南東の母家の柱に、節穴が開いていた。夜になると、その穴から、小兎の手が出てきて、手招きをする怪異があった。大臣はこれを聞いて、穴の上にお経を結びつけたり、仏像を懸けたりしたけれども、二、三日経つと、夜半ごろの人が皆寝静まると必ず怪異があった。そこで、矢から矢先をはずして、穴に

深く打ち込むと怪異が止まった。これは合点のゆかぬことで、「仏やお経の験よりも矢先の験を恐れるとは、どんな人の霊なのだろう」と、世人はいぶかつて噂したと伝えられている。

ところで、今昔物語の話が安和の変以前だとすると、安和の変で源満仲が押し入ったのは、西宮であつて高松殿ではないこととなります。このことを確かめるのに、うまい具合に、『後拾遺和歌集』に、西宮を詠った、恵慶法師の歌が載っています。

西宮のおほいまうちぎみつくしにまかりてのち、すみ侍け

るにしのみやの家を見ありきてよみはべりける 恵慶法師

松風も岸うつ浪もゝろともに

むかしにあらぬ声のするかな

後拾遺和歌集巻第十七・雑三・一〇〇〇

「西宮の大公卿」は、源高明のこと。詞書は、「源高明が筑紫にゆかれたのち、住んでいた西宮の家を見物して詠んだ」となっている。太宰府に左遷されるときには、すでに西宮に住んでいたことがわかります。したがって、安和の変のときは、高松殿は、別業となっていたか(逆に、西宮が別業かもしれませんが)、あるいは娘の源明子に伝領されていたらしいことがわかります。

ちなみに、第26回で紹介した、御子左・兼明親王(源兼明)は、源高明の異母兄(母は藤原菅根女淑姫)です。源兼明は、天禄二年(九七一)に左大臣に就任しています。源兼明から兼明親王への皇籍復帰の陰謀も藤原氏の内紛がらみ。藤原氏の専横がこのころからあからさまになっています。

■ 藤原道長室 高松殿

源高明は、藤原師輔の五女愛宮との間に、源明子を設けています。源明子は高松殿を伝領しており、のちに藤原道長の室となります。『大鏡』下之巻の「太政大臣道長」伝に、道長には二人の室（北の方）がいるとして、まず源雅信女の倫子の出自を紹介し、道長との間になした子女をあげています。続いて、明子の紹介のところを引用しましょう。

又、高松殿の上と申すも、源氏におはします。延喜の皇子高明親王を、延喜二十年十二月二十日、左大臣将、八日姓をたまはりて、左大臣将になし奉らせ給へりしに、思はざる外の事によりて、大臣とられて、帥にならせ給ひて、ながされ給ひし、いとく心うかりし事ぞかし。その御むすめにおはします。それをかの殿筑紫におはししける年、この姫君まだいと幼くおはししけるを、御をぞの十五の宮と申したるも、同じく延喜の皇子におはします、女子もおはせざりければ、この君を取り奉りて、養ひかしづき奉りて、もちみ給へるに、西宮殿も十五の宮もかくれさせ給ひし後に、故女院の后におはししをり、この姫君を迎へ奉らせ給ひて、東三條殿の東の對に帳をたて、壁代をひきて、わが御しつらひに聊おとさせ給はず、しすゑ聞えさせ給ひ、女房、侍、家司、下人まで別にあちあてさせ給ひて、姫君などのおはしませひし如くに、限りなく思へかしづき聞えさせ給ひしかば、御せうとの殿ばら、われもくとよしばみ申し給ひ

けれど、后かしく制し申させ給ひて、今の入道殿をぞ許し聞えさせ給ひければ、通ひ奉らせ給ひし程に、女君二所、男君、四所おはしますぞかし。

『大鏡』下之巻、「太政大臣道長」
『水鏡・大鏡・今鏡・増鏡』国民文庫刊行会（二九一〇）

(現代語訳)

また、高松殿の上とお呼びする方も、源氏の出でいらつしやる。醍醐天皇の皇子高明親王は（延喜二十年十二月二十八日に源氏の姓をたまわつて左大将として）左大臣に昇進されたのに、予想外のことよつて（大臣の位を剥奪されて）、太宰府の副長官になられた（配流された）のは、たいへんにこころ塞ぎのことであつた。高松殿は、その方（源高明）の姫君である。その方（源高明）が筑紫の太宰府に立された年、同じ醍醐天皇の皇子であつた叔父の十五の宮（盛明親王、源盛明）が、女のお子様がないので、まだたいへんに幼なかつたこの姫君をお引き取りになつて養女として養育なされた。西宮殿（源高明）も十五の宮（盛明親王）もおなくなりになつたのちは、故東三条女院（藤原詮子、藤原兼家の次女。一条天皇の母）がご存命で、円融天皇の后でいらつしやつた折に、この姫君をお迎えになつて、まるでわが子のよきに遇された。東三条殿の東の對に、部屋の間仕切りに几帳（移動式カーテン）を立てて、部屋の入口には壁代（カーテン）を垂らし、その設えは、いささかも手を抜

くことなく作り据えて、女房、侍、家司、下人まで、別に手当をなさつて、まるで実の姫君がいらつしやるように、深くおこころづかいなさつたので、年頃の息子をもつご兄弟が、われもわれもと結婚を申し込まれた。しかし、東三条女院は、体よくお断りになって、今の入道殿(藤原道長)にだけ許可を出され、入道殿(藤原道長)がお通いになることになった。このようにして、高松殿は入道殿(藤原道長)との間に、ご息女を二人、ご子息を四人設けられた。

東三條院(詮子)の父親藤原兼家と、源明子の母親愛宮とはどちらも藤原師輔の子供です。したがって、東三條院(詮子)と源明子は従姉妹です。また、藤原道長は、東三條院(詮子)とは同母の弟ですから、道長と源明子も従兄妹です。兄道隆の息伊周をさしおいて、弟の道長を支持するなど、東三條院(詮子)は、なかなかの遣り手ですね。多分、明子を通じて道長に対して影響力を行使する戦略だったと推測されます。

■ 堀川女御と高松殿女御

藤原道長と高松殿(明子)との間に生まれた長家(道長の六男)が御子左郎を伝領したことは、すでに第26回で述べました。藤原道長と高松殿(明子)との間に生まれた寛子は、小一条院の女御となりましたが、母と同じ高松殿に住んでいたので、高松殿女御と呼ばれました。小一条院の女御になったいきさつは、藤原道長の強引な外戚政策のあくどさがよくあらわれています。

小一条院は、敦明親王で、三条天皇の第一皇子です。三条天皇は、藤原道長の圧力で、皇太子として一条天皇の第二皇子敦成親王(道長の孫、のちの後一条天皇)としました。自分が退位した後一条天皇を即位させるとき、自分の第一皇子の敦明親王を後一条天皇の皇太子とすることを条件として道長に吞ませました。皇太子となった敦明親王は、小一条院(所在地は、現在の京都御苑内)を御所としました。ところが、三条天皇(上皇)が崩御すると、道長は敦明親王に圧力をかけて、皇太子を辞退させます。道長は、さすがに気がとがめたのか、敦明親王を小一条院として、上皇の待遇(准太上天皇)を与え、娘の寛子を娶めとわせます。

もともと、小一条院(敦明親王)には、正室藤原延子(堀川女御、堀川左大臣藤原顕光の息女)がいましたが、棚上げにされた恰好になり、心労のあまり咯血して頓死してしまいます。『後拾遺和歌集』には、堀川女御が詠んだが残っています。詞書には、「小一条院は、春宮(皇太子)であつたが、予想もしないのにその位をおりられたとき、見張り小屋などを壊す騒ぎをみて詠んだ」とあります。居宅の小一条院を、皇太子を降りたために退去する際のできごとを詠んだものと推測されます。

小一条院春宮ときこえける時おもはずに位おり給たまひけるに、

火たきやなどこぼちさわぐをみてよみ侍りける 堀河女御

雲居までたちのぼるべき煙かと

みえしおもひのほかにも有哉あるか

後拾遺和歌集卷第十七・雑三・九九〇

歌は、「見張り所の煙をみて、次の天皇の位につくための護衛が

詰めているとしか思い浮かばず、ほかの事態には思い及ばなかった」というほどの意味でしょう。

さらには、「それまでは一緒に住んでいた小一条院が、高松殿女御の住む高松殿に移り住んで、訪れが間遠くなってしまった頃に、松風が心をさらに傷つけるように吹いているのを聞いて」という詞書のついた歌が載っています。

同院高松女御にすみうつり給てたえぐたまひに成給ての比ころ、松

風心すぐく吹けるをきゝて

堀河女御

松風は色やみどりにふきつらん

もの思ふ人の身にぞしみぬる

後拾遺和歌集卷第十七・雑三・九九一

歌意は、「松風がすぐく吹いても、いつも変わらぬ緑色の葉ならば平気で耐えられるでしょう。しかし、心変わりをした男の訪れが遠のいたのを憂えている人にとつては、強すぎて、身にしむように冷たい」ととつておきましょう。

堀川女御の父の左大臣藤原顕光も、二年後に病死。怨霊となつて、「悪霊左府」とよばれ、道長一族に祟つたとされます。高松殿女御（寛子）が早世したのも、怨霊のせいだと噂されました。『十訓抄』によると菅屋道満に呪詛させたといわれています。

■ 二宮金次郎像と丸型郵便ポスト

高松神明社から姉小路通を東に進んで、南側。「ナガイ歌謡教室」と張り紙のある建物の二階部分に、町名看板「姉小路通衣



姉小路通 衣棚 西入突抜町①
あねらじじおり ころもたな せいいるつぎめけちよう



二種類の町名看板

棚西入突抜町」①が掲載されています。この看板は「上京区」とあり、旧字体の「區」がつかわれており、しかも右からの一行書きになっているので、当初から設置されている看板であることがわかります。カイゼル髭の役人が、看板の上部に位置しているのもめずらしい。

この建物の一階部分には、ライオンズクラブの町名看板も設置されています。

姉小路通と新町通の交差点を南へ。新町通の東側の店頭に二宮金次郎像が設置されています。京都市内では、珍しいので載せて

二宮金次郎像



おきました。

続いて、その南隣の建物は、なんともユニークな紅柄の和洋折衷で、屋根には阿吽の狛犬がのせられています。ここには、丸型郵便ポストが保存されています。

その銘板には、郵便差出箱一号丸型保存協会による、次のような説明が記載されています。

「郵便差出箱一号丸型」

昭和二十四年に全国に普及した「郵便差出箱一号丸型」と言う名称の郵便ポストです。高さ一三五 cm、直径四〇 cm、重さ八〇 kg の鑄鉄製で、昭和六十年には約十五万個設置されていましたが、現在では保存用に残すのみとなりました。これは、そのうちの二つで最初に設置されたこの地を記念して永く文化的に保存するものです。



丸型郵便ポスト

郵便差出箱一号丸型保存協会

■ 八幡山・川崎家住宅・鬼殿

新町三条の辻を南下すると、新町通東側奥まったところに八幡山の会所があります。新町通の東側に面したビルには、「八幡山保存会」(新町通三条下る三条町)の看板がかかげられています。

八幡山保存会の会所より、やや南に八幡山の組み立てがおこなわれるところがあります。ちょうど川崎家住宅の向かい側です。多分、結界の注連縄の奥に見える建物が収蔵庫でしょう。注連縄の斜め右上の二階部分に、「新町通三条下る三条町」④の看板が掲げられています。「中京区」の部分が左横書であることから、

新規に設置されたものです。

八幡山のご神体は、厨子入りの応神天皇馬上像で、普段は町会所（収蔵庫）の庭に八幡神社（小祠）として祀っています。この八幡神社は、堀川五条（現在は、若宮通花屋町上る若宮町に後継の神社あり）の若宮八幡宮（もともとは岩清水八幡宮の若宮が、東山五条に移されたのち、この町内に勧請したもの。八幡山は、後の祭に登場します。小祠は、総金箔を施した見事なもの。八幡山巡行時には、山に勧請した小祠の前に朱鳥居を設え、その笠木に鳩が二羽。若宮八幡宮については、本シリーズ第14回で詳しくとりあげました。

川崎家住宅（新町通六角上る）は、京都市指定有形文化財で、主屋、洋館、茶室、二十八畳蔵、十二畳蔵から成り立っています。大正十五年（一九二六）に綿花商井上利助が建てたもの。茶室を



八幡山保存会



八幡山収蔵庫

紫織庵と称しています。

三条町の西側のブロックについては、本シリーズ第28回の「鬼殿とは」で触れました。「鬼殿（三条南西洞院東、有佐宅、悪所云々 或朝成跡か）」という『拾芥抄』の記述を解説してありますので、参照してください。

■ 了頓図子

衣棚通の三条から六角の間は、了頓図子と呼ばれています。こはもともと茶人広野了頓の屋敷があったところで、図子の中ほど東側に、広野了頓邸跡の碑があり、京都市による駒札が設置されています。京都市の広報版の表示によれば、このあたりの町名表示は、衣棚通三条下る了頓図子町となっています。

駒札を、次に引用しておきましょう。

廣野了頓邸跡
（ひろのりょうとん）



新町通 三条 下る 三条町 ④

広野了頓邸跡の碑



(駒札)



川崎家住宅



(銘板)



■ 三条衣棚

江戸時代初期の地誌である「よさしゅうかし雍州府志」によると、足利家代々の從臣である廣野家は、將軍義晴よしはる、義輝よしてるの時代にこのちを領有した。

その後、安土桃山時代になって、末裔である廣野了頓は、剃髪してこの地に茶亭を構え、茶道を広めた。

当時、豊臣秀吉は京へ入洛した折に了頓邸を訪れ、茶を点じた了頓は、その縁で二百八十石の知行をあてがわれた。

また、やまなしなとぎつね山科言経とぎつねきょうぎの日記「言経卿記」にも、文禄三年（二五九四）五月十一日に、徳川家康が了頓邸を訪れ遊び、言経かるとおりのべ、古田織部ふるたのべらも同席したことを記している。了頓は、江戸時代に入って、徳川幕府からも知行四百石を受け、厚遇されて明治に及んだ。（後略）

京都市

さししよつこのたな三条衣棚は、かつて此の地にあつた寺々を顧客にした法衣店が密集したところです。寺々が、秀吉の天正転地により移転したあとも、長いあいだ、衣座としてその地位を保っていました。京都市蹟会による記念碑が、この地の繁栄を物語っています。

室町時代以降、この地に法衣業者が集まって棚売を始め、町名となつて現在に及んだ。殊に、弘治年間千切屋の祖が此所に店舗を開きしより、その分家、別家



三条衣棚の記念碑

一門次第に繁栄し、此町を中心として、近辺に同業を営んだもの百余軒の多きに上ったといふ。(後略)

法衣・仏具を商う千切屋は、今でも衣棚通三条上るで営業しています。この付近の案内板が御池通衣棚西入るに掲示してありますので、写真を載せておきましょう。そのほかに、法衣店としては、峰勘法衣店があるようです。

■ 黒 主 山

室町通を室町六角の辻から北上すると、黒主山の収蔵庫（中京区室町通三条下る烏帽子屋町）があります。この山は、謡曲「志



御池通衣棚西入るの案内板

賀」によるもので、六歌仙の一人大伴黒主おほとものくろぬしが桜の花を眺めている姿をあらわしています。

大伴黒主が、志賀明神として祭られているという伝承があり、志賀明神の山桜を見物に行った折に、大伴黒主の霊があらわれるという話が、謡曲「志賀」の骨子となっています。黒主山は、山人の姿にやつした黒主の霊が、薪を負って花の陰に休んでいる様をあらわしたものです。この設定は、紀貫之による古今和歌集序



黒主山収蔵庫

にあらわれた評

大伴のくろぬしはそのさまいやし。いはば、薪をおへ
るやま人の花のかげにやすめるがごとし。

を下敷きにしています。それにしても「そのさまいやし」は酷評
ですね。ただし、紀貫之は、大伴黒主に限らず、他の六歌仙につ
いても高い評価をあたえています。

■ 役行者山

姉小路通と室町通の辻の東南角に、永楽屋があり、その建物の
室町通に面したところに、役行者山の会所があります。ここに、



役行者山会所

後祭の昇かきやまき山「役行者山」えんのきやうじやまが立てられます。

役行者は、修験道の開祖といわれる役小角えんのせうかくのこと。その縁で、
後祭宵山の七月二十三日の午後に、聖護院の山伏による護摩焚き
がおこなわれます。

■ 鈴鹿山

鈴鹿山会所は、烏丸通姉小路下るにあります。鈴鹿山は後祭に
参加する山で、ご神体は鈴鹿権現（瀬織津姫尊せおりつひめのみこと）で、能衣装のい
でたちで、大長刀をもっています。これは、鈴鹿山で旅人を苦し
める悪鬼を退治したという伝承を題材にしています。

その南側、烏丸通三条上るに京都伝統工芸館あります。京都伝統工芸大学のキャンパスをしても機能しており、同校の卒業生や在校生が、伝統工芸の制作実演をおこなっています。竹工芸、金属工芸、仏像彫刻、漆工芸、木彫刻など。鈴鹿山会所のすぐ南にある縁から、祇園祭の鈴鹿山の京都伝統工芸大学の在校生が、昇き手として参加しているようです。

■ 院政時代の名残

三条通と烏丸通の西南の角には、みずほ銀行京都中央支店の赤レンガの建物があります。新しく見えるのは、旧第一銀行京都支店（辰野金吾の名建築）を解体して、二〇〇三年にレプリカ復元したため。この建物の占める、三条、烏丸、六角、室町に囲まれ



鈴鹿山会所



鈴鹿山（駒札）



京都伝統工芸館

た一角は、三条南殿（三条烏丸御所）とよばれ、平安時代後期から鎌倉時代中期まで、有力な女院の御所となったところ。当時の才媛が集まった場所。とくに、鳥羽上皇の御所を相続して、一一五一（？）〜一一八九には、上西門院（鳥羽上皇皇女統子内親王。母は、待賢門院）の御所。このとき、源頼朝が近侍していたらしい。銘板「三條南殿の遺址」が、みずほ銀行京都中央支店の南側、烏丸通に面したところにあります。また、「三條烏丸御所跡」の碑が、三条通烏丸西入南側（株式会社千總の前）にあります。

上西門院に仕えた上西門院兵衛は、待賢門院堀河の妹で、もともと、待賢門院に仕えていました。そのため、勅撰和歌集に

は待賢門院兵衛という名前で出ていることがあります。姉妹の和歌が千載和歌集に連続して掲載されています。

百首歌奉りける時よめる

待賢門院堀河

白雲と峰の桜は見ゆれども

月のひかりは隔ざりけり

上西門院兵衛

花の色に光さしそふ春のよぞ

木の間の月は見るべかりける

〔千載和歌集卷一春歌上・七二・七三〕

一方、その北側の一角（三条、烏丸、姉小路、室町に囲まれた一角）は、三条西殿とよばれ、白河法皇、鳥羽上皇、待賢門院などの御所として、院政の中心となったところ。三条通と烏丸通の西北の角にあるスターバックスの南側、三条通に面したところに「三条西殿・三条大路跡」の銘板があります。

待賢門院堀河の百人一首所載の和歌。

ながからむ心も知らず黒髪のみだれてけさはものをこそ思へ

待賢門院堀河

〔千載和歌集卷十三恋歌三・八〇二〕

待賢門院堀河は永治二年（一一四二）出家。この歌は、出家後の作品。待賢門院の子である崇徳院の保元の乱は一一五二年。



浄妙山会所



六角通 烏丸西入骨屋町⑤

■ 浄妙山

浄妙山の会所は、六角通烏丸西入骨屋町にあります。この建物の二階部分に、「六角通烏丸西入骨屋町」⑤（ライオンズクラブによるもの）が掲げられています。

このあたりは、浄妙山がここに作られるころ（一五〇〇ごろ）には、扇の骨を製作する業者が集まっていたので、骨屋町の町名が付きましました。その後、骨屋の多くは廃業し、かわりに、烏丸通を渡ったところにある六角堂の参拝客相手の宿屋街になっていました。

浄妙山は、平家物語巻第四「橋合戦」の記載によるもの。以仁王（高倉宮）は、平家の横暴に対抗して、源頼政の勧めに従って、源氏に武装蜂起を促しました（以仁王の令旨）。しかし、事前に計

画がもれ、三井寺に逃れたが、三井寺も安住の地ではなく、南都（興福寺）の寺院勢力を頼ることにしました。この逃避行の途中に、有名な「橋合戦」があります。三井寺の僧兵千余騎と頼政の兵五百余騎を加えた軍勢は、宇治川をくだり、まず平等院（三井寺の末寺）に向かいました。これを阻止しようとした平知盛の二万八千余騎の軍勢と、宇治橋で対峙しました。この軍勢が宇治橋を渡るのを阻止としたときの顛末が「橋合戦」です。以仁王（高倉宮）を南都に逃すための、時間稼ぎが主な目的です。

平家物語巻第四「橋合戦」によると、源頼政は、宇治橋の橋板三間分をはずさせ、平家軍を渡れぬようにしました。三井寺の僧兵浄妙房は橋の上へ進み、大声で「日ごろは音にも聞きつらむ、いまは目にもみ給へ。三井寺にはそのかくれなし。堂衆（どうじゅう）のなかに、筒井の浄妙明秀といふ、一人当千（いちにんたうぜん）の兵者（つわもの）ぞや。われと思はむ人は、寄りあへや、見参せむ」と叫び、散々に矢を射って、十二人ほど射殺。十一人に手負いを負わせ、さらに橋の行桁をさらさらと走り渡ったと描写しています。その後ろを一来法師いうものが続いていたが、行桁が狭いので、浄妙房の甲の先に手をおいて、「悪しう候ふ、浄妙房」として、肩をつんど踊り越えて先頭にでて戦いました。結局、一来法師は討死。この一来法師が、浄妙房を踊り越えた瞬間が、浄妙山に写し取られています。

源頼政は、本シリーズ第10回で取り上げたように、平家物語から題材をとった謡曲「鶴」にも出てきます。また、橋合戦に続く戦いに敗れた源頼政は、平等院で扇を敷いて自害したという伝承があり、これが謡曲「頼政」の題材になっています。

後祭の復活

祇園祭の山鉾巡行は、もともと前祭と後祭に分かれて挙行されていましたが、交通事情の悪化から、一九六六年から両者を統一して、毎年七月十七日に執り行うようになっています。大船鉾が一五〇年振りに復活したこともあって、二〇一四年に後祭が復活。後祭の山鉾巡行は毎年七月二十四日に挙行するようになりました。

後祭で巡行する山鉾は次の十基です。北観音山と南観音山は「山」となっていますが、その組みあがった形は、どうみても「鉾」です。違いについてはいろいろ説明が流布していますが、もう一つよくわからない。

北観音山	新町通六角下ル
南観音山	新町通錦小路上ル
橋弁慶山	蛸薬師通室町東入
浄妙山	六角通烏丸西入
鈴鹿山	烏丸通三条上ル
役行者山	室町三条上ル
黒主山	室町通三条下ル
鯉山	室町通六角下ル
八幡山	新町通三条下ル
大船鉾	新町通四条下ル

組みあがった山鉾の勇姿は、祇園祭のホームページ
<http://www.gionnatsuri.or.jp/yamahoko/> をご覧ください。



プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (<http://xyntex.com>) を主宰。それまでの数理立体化学に関する仕事の集大成として、二〇一三年に、モンドグラフ「Combinatorial Enumeration of Graphs, Three-Dimensional Structures, and Chemical Compounds」(576 ページ) をセルビアの Kragujevac 大学出版局 (Mathematical Chemistry Monographs シリーズ第 15 巻) より出版。さらに二〇一五年に、キングダム「Mathematical Stereochemistry」(437 ページ) をドイツの DeGruyter 社から出版。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」(第 29 回) 2017/12/20

© 2007, 2008, 2010, 2017 藤田眞作 <http://xyntex.com>